

## 「自己をならふ」ということ

### ―『正法眼蔵』にみる教育の本質―

齋 藤 俊 哉

#### はじめに

「乱塾時代」「受験地獄」「落ちこぼれ」「教育の荒廃」等々、今日ほど教育が社会問題として、批判や論争のまっただ中に置かれている時代はないであろう。それは、教育の現象面のみをとらえ、本質を忘れた結果ではなからうか。

道元(一一〇〇―一二五三)がその主著『正法眼蔵』において、教育の本質に係る問題についてまとめて述べている箇所はない。しかし、読み進んでいる間に、随所に見られる「仏性」「無師独悟」「面授」「感応道交」等の語は、私にとって教育の本質を突いているように思われてならない。以下に、この問題について考察を進めてみたいと思う。

#### 一、教育についての定義

「教育」についての一般的な定義は、『現代教育用語辞典』(第一法規刊)では、「広義には、人間形成に作用するすべ

ての精神的影響をいうが、狭義の固有の意味では、意識的に人間形成に働きかける過程または社会的機能」とし、「広辞苑」(岩波書店刊)では、「人間に他から意図をもって働きかけ、望ましい姿に変化させ、価値を実現する活動」としている。これらの定義では、個々の人間に対する他からの働きかけのみが教育の主要な機能となり、この意味での「教育する」「教育を受ける」と言う考えが、社会はもとより、教師間ですら一般化しているように思われる。

しかし、教育とは「人間のあらゆる発達を助長して、人間を真の、望ましい人間たらしめる自然的、意図的な一切の活動」と(金子武蔵編『倫理学事典』弘文堂刊)でなければならぬ。すなわち「人間を自然性の角度から理解するとき、教育とは人間的発達の助長せんとする人間の営み」(同右)であり、社会性を中心とみると「社会が存続発展のために人間を社会に貢献しその必要を充たしうる社会的人間へと形成してゆく一切の目的作用」(同右)であり、また人格性においては「自然的・社会的人間を、自己目的であり

絶対的価値すなわち尊厳を有する人格として、完成せしめようとする人間のはたらき」(同右)である。この意味での教育においては、人間の自己形成的、他者形成的なものと自己相互形成的な面を有し、教育の目的は自覚的自己形成と言えるであろう。

では、人間の自覚的自己形成に対する教育作用とは、どのようなものでなければならないであろうか。

## 二、「自己をならふ」―教育の目的

すべての人間は、自己実現の絶対的可能性を有するがゆえに、教育は自己形成的他者形成的な営みである。それゆえ人間は、つねに自覚的自己形成すなわち自己をそのように成らせ育てる存在でなければならない。道元は「現成公案」巻において、学道の目的を、

「仏道をならふといふは、自己をならふ也。自己をならふといふは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、萬法に證せらるるなり。萬法に證せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。悟迹の休歇なるあり、休歇なる悟迹を長長出ならしむ。」(大久保道舟編『古本校訂正法眼蔵 全』筑摩書房刊七〇八頁)と述べている。

まず、「仏道をならふといふは、自己をならふ」として、仏道をならう目的を提起している。「自己をならふ」とは、

「自己をつくることをならふ」ことで、その「つくること」とは究極的に「仏になることをならふ」ことである。「仏になる」とは、自己の存在の何たるかをならう、すなわち自己の生き方をならうことである。これこそ、自己実現の真の意味といえよう。

次に、「自己をならふ」者は、「自己をわする」ことが必要である。忘れるとは、あくまでも自己を確立しながらそれを超えること、すなわち「何を忘れ」「何を忘れてはならないのか」を明確に区別することによって、自己を意識しながらその意識を超えて、なすべきことを実践する。それは、主体性の否定でもなければ、自主性の喪失でもない。主体性の否定は責任の根拠の喪失で、無自覚は自己喪失であり、また逆に自己主張に基づく自主的判断と主体的行動は、独断に陥ることによる自己喪失であろう。「自己をわする」とは、「自己をわすれ」て萬法すなわちすべての対象と対決し、対象を動かして自己のものとすることによって自己を得るのである。言い換えれば、自己を得ることによって自己中心的な生き方を捨てて、他者との共在を自覚し他者によって自己の存在を自覚するのである。

それゆえ、自己自身が他者の生き方にかかわることによって、自己と他者が共感し融合する感應道交が生じる。それは主観的真理と客観的真理の統一による真の自己の発見、すなわち自己実現がなされる、この過程を教育作用ということができる。

### 三、道を求める者―教育を受ける者

すべての人間は本質的に平等であり、「この法は人々の分上ゆたかにそなわ」（大久保前掲書「弁道話」七二九頁）っているがゆえに、自己実現の絶対的可能性を有するのである。もし、「この法」「生知」がなければ、経巻・正師と出会っても正法を聞くことはできず、また悟ることもできない。それゆえ、「法性」巻において、

「あるいは経巻にしたがひ、あるいは知識にしたがひて参學するに、無師獨悟するなり。無師獨悟は、法性の施為なり。たとひ生知なりとも、かならず尋師訪道すべし。たとひ無生知なりとも、かならず功夫辨道すべし。いづれの箇箇か生知にあらざらん、佛果菩提にいたるまでも、経巻知識にしたがふ」（大久保前掲書四一五頁）のである。

無師獨悟は、仏性それ自体の働きかけによるものであって経巻・知識を媒介として自らの力によって得ようとする自覚的な働きである。道を求める者の仏性それ自体の働きかけがないとするならば、経巻・知識との出会いそのものの意味がなくなってしまうのであるが、すべての人間が仏性を有することによって、その働きかけはすべての人間自らが行うのである。しかし、前掲の文を詳細に読み進んでいくと、道元は無師獨悟について二つの異なった考えを示しているように思われる。

一は、前半の「あるいは経巻にしたがひ、あるいは知識にしたがひて参學するに、無師獨悟なり」と、今一は、「無師獨悟は、法性の施為なり。たとひ生知なりとも、かならず尋師訪道すべし」の二義である。この二つの意味は、結果的には一つの意味に統一されてしまうのであるが、二つの意味とはそれに至るための順序と考えるとよいであろう。

第一の無師獨悟は、「法性の施為なり」の場合である。この意味における無師獨悟は、法性すなわち人間に本来そなわる真理性それ自体の働きかけによる場合である。これは、人間がすべて佛性であるとしても、その仏性が法性を明らかにしようとする働きかけと、法性が仏性に働きかける相互依存関係による発心である。この場合の「法性」は、悟りとなった「法性」ではなく、未だ「法性」そのものであって、それがさらに仏性の生知によって悟りへと向うのである。それゆえ、この場合の無師獨悟は、悟りを求める「発菩提心の無師獨悟」と考えてよいであろう。

第二は、或従経巻・或従知識ながらの無師獨悟である。この経巻は法性それ自体であり、また知識も法性それ自体で、法性は自己以外の何ものでもない。「自證三昧」巻の次の一節は、明瞭にそのことを示している。

「たとひ知識にもしたがひ、たとひ経巻にもしたがふ、みなこれ自己にしたがふなり。経巻おのれづから自経巻なり、知識おのれづから自知識なり」（大久保前掲書五三三頁）

経巻・知識に出会うことによって法性三昧にひたる。すなわち経巻・知識の働きかけによって、自己の法性が明らかにされるのである。これが、悟りである。悟りは、自己自身の問題であって、他によって悟らせてもらうのでもない、無師独悟である。これは、「大悟の無師独悟」と考えてよいと思われる。

しかし、無師独悟の以上の二義は、異なるとはいえ一義である。すなわち、自己自身のもつ修証の力を発現し、自己に本来的にそなわっている法性を実現する無師独悟、へと統一されて、はじめて真の意味を見出すと思われる。

さて、無師独悟におけるこの二義は、教育において重要な意味を有する。すなわち、教育を受けようと志すのは自己自身であり、それによって自己実現するのは自己自身で、あくまでもそれは「自己をならふ」ことである。しかるに、教育において現実の問題として大きくわれわれの前に立ちはだかるのは、志を立てて実際に教育を受け出すと同時に、個々の人間のそれぞれの違いが現実化することである。このことについて、現在われわれの社会では、まったく相反する二つの立場が存する。一は、違いはなくすべて平等であるとする立場と、他は現実には個人に違いがあるとする立場である。道元は、このことについて極めて卓越した考えを述べている。道元が、「この法は、人々の分上にゆたかにそなわる」とするのは、人間の平等性を主張していることに他ならない。しかるに、「大悟」巻で「人根に多般あり」として、人間の

素質や能力の多様性を指摘し、更に続けて次のように述べている。

「いはく、生知。これは生じて生を透脱するなり。いはゆるは、生の初中後際に體究なり。いはく、學而知。これは學して自己を究竟す。いはゆるは、學の皮肉骨髓を體究するなり。いはく、佛知者あり。これは生知にあらず、學知にあらず。自他の際を超越して、遮裏に無端なり、自他に無拘なり。いはく、無師知者あり。善知識によらず、経巻によらず、性によらず、相によらず、自を撥転せず、他を互せざれども、露堂堂なり。」（大久保前掲書八二頁）

ここでは、人間の素質や能力である機根として、「生知」「學而知」「仏知者」「無師知者」の四種を挙げている。これらの機根は、それぞれに素質的能力的な差異はあるが、いずれが優れ、いずれが劣っているとはできないのであって、それぞれに適した優れた業績を実現するものである。それゆえ、機根の差異を是認しながら、それに適応した悟りの現実化を、すべての人間が普遍的に有していることが真の平等である。

教育を受けようと発心することそれ自体が無師独悟であるとするならば、個個人の機根を見出し、それに触れ、それを伸長させ、自己実現に至らせるための導師訪道が必要である。それゆえ、正師すなわち教育をする者は、機根に対して無自覚な教育を受ける者を自覚させるための働きかけを、積極的に行なうものでなければならない。この働きかけは、正師に

とって未だ漠然としたものである。特に教育を受ける者には、自己にとって何が問題で、何を解決すべきかが明瞭になってはいない。ただ、自己が現に置かれている状況からの脱出を企図しているに過ぎない。

法は、感覚的な認識によって知り得るというようなものではない。法は、自己の心の問題として、自己自身によって知る以外にない、すなわち無師独悟である。法を真に自己の問題としてとらえ、発展させ、完全に自己のものとして悟りを得るためには、それを触発し、導く経巻・知識が必要である。そこに、教育を受ける者と教育する者との間に相即不離の關係が生じるのである。しからば、教育する者すなわち知識・正師とは、どのような存在であろうか。

#### 四、正師―教育する者

教育を受ける者が生来の知者であっても、その仏性の自己実現を図るためには、触発し導く正師との出会いがなければならない。道元が、「自證三昧」巻において、

「たとひ生知といふとも、師承にあらざれば體達すべからず、生知いまだ師にあはざれば、不生知を知らず、不生不知をしらず、たとひ生知といふとも、佛祖の大道はしるべきにあらず、學してしるべきなり。」（大久保前掲書五五五頁）と述べているのは、まさに正師との出会いの重大性と必要性を示しているのである。

人間の師である正師は、人間であるがゆえに、ただ単に教育を受ける者自身の活動のみを待つのではなく、教育を受ける者に対して自ら進んで働きかける力を有する者でなければならぬ。この働きかける力とは、教育を受ける者を触発し、それそれに適した方法によって、投げかけるものを受け止め、また迷う者をいかにして本来の道に引きもどし、教育を受ける者の可能性を見通して自己実現に対して、援助を与える力でなければならない。道元はこの両者の關係について、「身心學道」巻で、

「感應道交して、菩提心をおこし」（大久保前掲書三六頁）

とし、また「發菩提心」巻に

「感應道交するところに、發菩提心するなり。」（同上六

四五頁）

さらに、「歸依佛法僧宝」巻では、

「感應道交するとき成就するなり。」（同上六六七頁）

と述べているように、教育を受ける者と教育する者との間に感應道交すなわち相互作用がなければならない。相互作用は、教育を受ける者の心となり、教育を受ける者の心は教育する者の心となる感應道交そのものである。

教育をする者が、教育を受ける者のために法を説くということは、「自證三昧」巻で道元が述べているように、

「自己を體達し、他己を體達する、佛祖の大道なり。ただまさに自初心の參學をめぐらして、他初心の參學を同參

すべし。初心より自他ともに同参してもゆくに、究竟同参に得倒するなり。自功夫のごとく、他功夫をもすすむ」

(同上五五五頁)

べきものであって、自己の初心の頃の参学を思い巡らして、教育を受ける者の初心の参学をいとし憐れみ、初心から自他共手を相携え、自己の修行の如く他にも修行を勧めるのでなければならぬ。また、

「為説はかならずしも自他にかかはれず。他のための説著、すなはちみづからのための説著なり。自と自と、同参の聞説なり。」(「白證三昧」同上五五四頁)

とし、さらに

「一法一儀を参學するより、すなはち為他の志氣を衝天せしむるなり。しかあるによりて、自他を脱落するなり。」

さらに自己参徹すれば、さきより参徹他已なり。よく他已を参徹すれば、自己参徹」(同上五五五頁)

するのである。真に教育者としての責任を果たし得る者は、まず自己自身が真の道を求める者でなければならない。すなわち教育をする者は、自己の修行・参学に徹した者でなければならない、それによって教育を受ける者にも修行・参学に徹せしめることができ、また他のために説くということは、自己自身が参学することではなければならない。教育をする者である正師は、法性(真理)そのもので、法性の絶対性はあらゆる事物の働きかけがなければならないため、事物のありのままの姿をそのまま見ることができるのでなければならない。

正師であろうと、悟った当初は悟り臭さに自らが酔い、身心に仏法が十分に体得されたように思い込んでいる。しかし、悟り臭さが無くなった時、初めて真実の道にかなない、気取らず、つくらず、多弁に流れず、ありのままの姿を見せることができるのである。そして、仏法が身心に充足しているためにかえって不足しているように思い、道を求めようとするのである。これこそが、真の教育をする者すなわち正師の姿といえるであろう。

## 五、面授——教育をする者と教育を受ける

### 者との関係

われわれは、教育によって人格の形成を意図しても、自己に備わる仏性に気付かず、他にそれを求めようとしてかえってその周辺から離れ遠去かっている。そのため、自己の力以上のものを求めて挫折し、他人への関心に終始して自己を見失っていることに気付かないでいる。それゆえ、師に従って学ばなければならないのである。しからば、教育をする者と教育を受ける者との関係は、どのようなものでなければならないか。道元は「白證三昧」巻で、

「或從知識の正當恁麼時、あるいは半面を相見す、あるいは半身を相見す、あるいは全面を相見す。あるいは全身を相見す。半白を相見することあり、半他を相見することあり。」(大久保前掲書五五二頁)

と述べているのは、まさにこの関係の真のあり方といえよう。教育をする者すなわち正師は、それ自身すでに道を得た者で、道それ自体であり、見ることが出来る法そのものである。教育を受ける者は、自己の正師のある時は半面に出会い、あるいは全身に出会い、自己の半面に出会うこともあり、他己の半面に出会うこともある。正師に従うにしても経巻に従うにしても自己に従うことで、それは経巻そのものが自己自身としての経巻であり、正師は自己自身としての正師である。すなわち、自己自身と正師との対決によって、かえってそこに師の半面・全面に自己自身の姿を出して、独悟するのである。

正師は、教育を受ける者からの働きかけを待つのではなく、正師自身が教育を受ける者に対して働きかけ、機根による可能性を見通し、それを実現させようとする働きかけを行うのである。そこに、正師と教育を受ける者との同時参学の意味があり、全人格的な触れ合いによる面授が実現する契機が存する。

面授とは、師が弟子に面々相對して法を伝授することであるが、道元は、次のように述べている。

「迦葉尊者したしく世尊の面授を面授せり、心授せり、身授せり、眼授せり。」

……(中略)……

面授佛の面授佛に面授するなり。葛藤をもて葛藤に面授して、さらに断絶せず。眼を開いて眼授し、眼受す。面をあらはして面に面授し、面受す。面授は面處の受授なり。

心を拈じて心に心授し、心受す。身を現じて身を身授するなり。」(「面授」巻大久保前掲書四四七～八頁)

面授は、正師の心と教育を受ける者の心との一体化、すなわち正師の心は教育を受ける者の心となり、教育を受ける者の心は正師の心となることによって、正師から教育を受ける者へ、教育を受ける者が正師への感応道交である。しかし、面授に至るまでには、正師と教育を受ける者との間に激しい葛藤もあるが、葛藤こそ心と心の触れ合いであることを知らなければならぬ。葛藤が葛藤を超えて面授が実現するために、正師には道を得た者として、教育を受ける者の可能性を実現させようとする慈悲があるからに他ならない。

さて終りに、前述の無師独悟と面授の関係をどのように考えるべきであろうか。

「自己をならふ」主体は、あくまでも教育を受ける者それ自身であり、また正師それ自身でもある。両者共に仏性・法性を有し、両者の全人格的な触れ合いによって智慧そのものが開発され、やがてそれぞれの仏性がそれぞれに自己実現すなわち無師独悟し、正師より法を自己のものとする面授が実現する。それゆえ、無師独悟は面授であり、面授は無師独悟であって相即不離の關係にあり、ここに心の触れ合いによる自己実現を目ざす教育の本質が存すると思われる。

## おわりに

教育の本質とは、正師との出会いと心の触れ合いにより、  
機根の可能性を見出して伸長させることによって、自己実現  
させることと考えられる。

現在、教育の方法として各種各様なものが提起され、実践  
されている。一人ひとりを伸ばすための種々の方法論、検査、  
教育相談等枚挙にいとまがないが、いずれにしても人間形成  
を目ざしている。しかし、これらに通ずる本質的なものが  
『正法眼蔵』の文中の端々に見られるということは、何事か  
に徹し悟り得た人は、教育の何たるかを知らずして、教育の  
真の本質を知り得ていると、いって過言でないであろう。

## 〔参考文献〕

- 中山延二著「道元の研究」(岩波書店)  
高橋賢陳著「道元の教説」(理想社)  
田中忠雄編「学道」(「道元禅」第二巻、誠信書房)  
桜井秀雄稿「禅における教育論」(講座「仏教思想」第三  
巻、理想社)

(北海道恵庭北高等学校教諭)